勇者は作るものであって作られるものではない

蒼のシュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者は作るものであって作られるものではない

【Ｎコード】
Ｎ７０４０Ｚ

【作者名】
蒼のシュウ

【あらすじ】
勇者、ゲームやアニメでしか通用しないその名前、この現代社会では考えられない、その職業に俺、雨宮颯真（あまみやそうま）はなってしまった
学園生活で俺は普通の生活を送っていたのに・・・・！？
どこで間違ったのだろう・・・・・・
だがそんなことも言ってられない
俺は勇者という職業を精一杯に務めることにした
雨宮颯真視点で送る勇者は作るものであって作られるものではない
どうぞお読みください！

普通の高校生・・・・なんだぜ？（前書き）

どうも、前まで、ほかの小説を書いておりましたが、ネタが尽きたのでやめました

なので新しくこの小説を始めたいと思います
みなさんどうかよろしくお願いします

コメントや、お気に入り追加をしてもらえると大変うれしいです
では！どうぞお楽しみください！（楽しめるものなのかわからないが）

普通の高校生・・・・なんだぜ？

『勇者』
誰もが知っているその名前
とはいっても、『勇者』にも色々ある、魔王を倒すために生まれた勇者、みんなを助けるために生まれた勇者
しかし、俺はそのどれにも当てはまらない、いや、どっちにも当てはまるのだろうか
よくわからない『勇者』になってしまった
正確には、そうさせられた、といったほうがいいだろう
俺は前まで、『勇者』という人物は生まれてくるものだと思っていた、血筋などから
しかし現実は違い、『勇者』というものは、作られるものだということを知った
なぜ知ったかって？
そんなの簡単だ
実際に俺が体験したからだ
まあ、まずは一つ一つ話していこうか

†

†

とある日の朝、俺はいつもより早く目が覚めた、まだ辺りが薄暗く鶏や雀もまだ鳴いていなかった
いつもの俺だったら七時半くらいに起きて、ぎりぎり学校に間に合うくらいなのだが、その日はそうもいかなく、朝を早く起きる人は何をしているのか疑問に思った
学校の準備を済ませる、とは言っても、スクールバッグの中に教科書を詰め込んだだけなんだが、やり終えたあと、俺は何もすることがなく、ベッドの上でぐだぐだしていた
そう、俺はどこにでもいる普通の高校生、普通の学校、普通の家、

父、母、妹という、どこにでもある家庭
特にこれといって得意なものはない、特殊なことも何一つなかった
ベッドの上でぐだぐだしていると、雀が外を飛び回り始めた
チュンチュンという、朝から聞くにはうざったらしいとしか思えない鳴き声を出しながら
そのうち、家の中から部屋のドアが開く音がした、母や父が起きたのであろうと俺は推測する、十六年間も一緒にいればわかるさ
その音を聞き、俺は部屋を出た
「あら、颯真がこんな時間に起きるなんて、天変地異の前触れかしらね」
「母さん、いくらなんでも天変地異は酷過ぎるぜ」
「いや、それにしてもお前が早起きとはな、父さん感心するぞ」
「親バカか？俺だって早起きくらいするさ」
やることは何もないけどな
「いまから朝ごはんの支度するから、顔洗ってらっしゃい」
「了解」
だるそうな声をだし、俺は洗面台に向かった
中央に鏡があり、脇に歯ブラシなどを入れるために棚がついている、ごく一般的な洗面台だ、蛇口をひねり水を出す
両手で水を受け止め顔につける
夏に入るちょっと前の今の時期には丁度いい冷たさだった
タオルを拾い、顔を拭く、次に歯ブラシを手に取り、歯磨き粉をつけ、歯を磨く
使っている歯磨き粉はク◇アマ◇クス、眠気が一気にとぶぜ？
くまなく磨き、口を二、三回ゆすぐ
口の中がすっきりする、流石ク◇アマ◇クス
眠気が覚めたところで、俺はリビングに戻り、ソファーに腰掛ける、低反発なソファーはとても気持ちがいい
「颯真、学校楽しいか？」
「父さん、何回目だ？そのセリフいい加減聞き飽きたぞ、いつも普

通だっていってんだろ？」
「そうか……父さんがお前みたいなときはな――――――――」
聞くと長いので無視をする
父もボケが始まったか？……いやそれはないか、なんせ、まだ三十前半のはずだ、父も母も、学生の時に結婚をしたらしく、あまり年をとっていない、おかげで俺と妹の年の差は一歳だけだ
「できたわよー」
母の声とともに朝ごはんが食卓に並んだ
母がおばさん口調なのは、母親みたいにみられるため、だそうだ、そんなことしなくても、十分母親っぽいんだが
「颯真、莉麻ちゃんのこと起こしてきてくれる？」
「はいはい……」
いつもなら逆の立場なのだが、その日だけは違っていた、まあ、たまにはいいだろってことだな
階段を上り、二階に上がる、俺の部屋の隣が妹の部屋だ
妹も思春期らしく、兄の俺がこの間無断で入ったら、俺の部屋にあったエロ本をリビングに置かれるという精神的なダメージを負うことをしてきた
だが、この場合はそんなことも言ってられないだろう、何せ起こしてあげるのだから
部屋のドアをあけ、中に入る
先ほど言った通り、妹も思春期らしく、香水などを使っている、おかげで部屋は……女子が好きそうな、あまったるい香水の匂いがした
「お～い、起きろぉ莉麻～、朝だぞ～」
とてもスローな声で言ってみた
「ふあ…、ん？お兄ちゃん……？」
「そうだお前の大事なお兄ちゃん」
「……お兄ちゃんもついに」
「ついになんだよ！」
「で？どうしたの？」

「いや起こしに来たんだろうが」
「そう」
「そうって……それだけ？」
「お兄ちゃんが早起きしてる！」
「今頃かよ！」
「お兄ちゃん、年ごろの妹の部屋に、勝手に入るのはよくないと思うよ！」
「……そうだね、じゃあ朝飯だからな」
なんでだろう俺が起こしに来てやったのに
誰でも絶対にそう思うだろうと心の中で思いながら、俺は、リビングに戻った
「はやくきなさぁーい！」
味噌汁のいいにおいとともに俺は席に座る
「いただきます」
ご飯、味噌汁、サラダ、目玉焼きベーコン……、まぁ普通ですよ
母は料理がうまく、味はおいしい
朝ごはんをさっさと食べ終え、俺は学校に向かう準備をする
制服を着、ネクタイを締め、靴をはく
そうしているうちに玄関のチャイムが鳴った
「おーい颯真ぁ、いくぞー」
「おーう、琉、今行く、じゃあ母さん父さん行ってくるよー」
「はーい」
俺は玄関のドアを開け、外に出る
「よー、颯真、今日は早いんじゃねぇの？」
「……そのセリフ、さっきからめっちゃ聞いてるんだが」
「だってよ、お前いっつも俺が来てから起きるじゃん」
「間違ってねぇけどな」
こいつは幼馴染の紀陸琉、ちっさい頃からよく遊んでるまあ、親友だ
中肉中背、髪型は少しチャラめの髪型、目は活発なこいつにはあってる

なんで幼馴染が女じゃないのかって？俺が聞きたいよ
そんなこんなで俺たちは、歩いて学校に向かう
うちの学校はたいていの生徒が自転車通学なのだが、俺たちは学校から家が近いということで、徒歩で学校に行っている、毎朝こいつをしゃべっていれば、すぐ着くくらいの距離だ
「そういやさぁ、颯真、今日転校生が来るらしいぜ？しかも女子だぜ女子！」
「ふぅーん……、可愛いのか？」
「俺に聞くなよ、俺だってそんなの知ってたらいろいろ準備するさ」
「お前にはどっちにしろ無理だろうけどな、てかお前そんな情報どっからとってくるんだよ」
「ふっ、甘いぜ颯真君、今は情報が大事な社会だぜ？」
「そうかい」
「……せめてもうちょっとリアクションとろうぜ？」
「わーすごーい、そうなんだぁ！」
「・・・・・・俺が悪かったよ」
こいつと話していると飽きが来なくてとても楽しい、流石一六年間の付き合いは違うぜ
「あっ、颯真じゃん！おはよー！」
「よー、美歌、おっはー」
「おっす橘、元気してるか？」
「いたんだ紀陸」
「ひっでぇ、何、その俺はついでみたいな言い方」
「そういったつもりなんだけど？」
「・・・・・神様、なんで僕はこんなにもいじめられるのですか」
「でもそういうのが好きなんだろ？」
「俺はマゾじゃねぇよ！」
「「え・・・・？」」
「なに不思議がってんだよ二人してよ！」
きゃはは、と笑う俺と美歌、こいつは橘美歌、こいつとは小学校か

らの縁だ
ロングストレートの茶髪の髪型に、カラーコンタクトをしているのかあかっぽい目、身長は女性としては大きい方である、顔だちは高校生にしては大人っぽい顔つきをしている
胸・・・・・は、うん、歩くたびに揺れると言えばわかるであろう
「ねぇー颯真ぁ、今日さ、教科書忘れちゃったから見せてくれない？」
「なんでだよ、今から戻れば間に合うんじゃねーの？」
「だって・・・・・面倒くさいじゃん？」
「・・・・・・わかなくもないから貸してやるよ」
「ありがと颯真！大好き！愛してる！」
「年ごろの女が、簡単に大好きとか、愛してるとかっていうな」
「すいませぇ～ん」
「なあ、橘、俺にも大好きって言ってみて」
「奈落の底に落ちろ」
「・・・・・・・・颯真、助けて俺もう生きていけない」
また二人で大笑いした
そんなこんなで、学校についた
【鳳聖凰蘭学園】
そんな目立つ文字が校門に彫ってある
私立鳳聖凰蘭学園
通称、鳳蘭
全校生徒が千五百人のそこそこ人の多い学園だ
あとはどこにでもある学園と同じ
少し違うと思われるものをあげるとすれば、噴水や、芝生があるぐらいだ
すでにいくつかの部活動は朝練を始めていた
威勢のいい掛け声から、女子たちのかわいい声などたくさんの声が聞こえてくる
そのたくさんの声の中に

「しってるぅ？今日転校生が来るんだってぇ！」
という言葉が混じっていた、ふむ、いつも思うんだがそんな情報どこで手に入れてくるんだろう、誰か俺に教えてくれ
「ほら、言ったろ？俺の言った通りだ」
さっきの会話を聞いたのだろうか、琉が俺を小突きながら言った
「まだわかんねぇだろ？本当にくるのかも」
そうは言いつつも、俺は少しだけ期待をしていた
教室につき特にすることもなく、机に突っ伏していた
机は横に長いもので、二人で一つの割合で使っていく、俺の隣はもちろん琉
「俺ちょっと寝るから、先公来たらいってくれよ」
「あいよ」
俺は琉にそういい残し、闇の中にフェードアウトしていった

†

†

「・・・・・そう・・・・・・・・・そうま・・・・・・・・・颯真！起きろ！先生来たぞ！」
「・・・・・あ、うん」
耳元で大きな声を出された俺は、目をこすりながら起きた、周りを見ると生徒が全員来ており、すでに前を見ていた
「皆さんに今日は、いいお知らせがあります」
クラスの何人かの男子が先生を煽るように、ヒューヒューと言っていた
「なんと、このクラスに転校生が来ます！」
「まじだったのかよ・・・・・」
琉にしか聞こえない声で俺は言った
「な？いったろ？俺の情報は正しいって」
「いやお前は言った通りだとは言ってたが、正しいとは・・・・・」
「・・・・・面倒くせぇなお前」
「よく言われるよ」

そんなガキっぽい会話を済ませ、前のドアを見ていた
するとガラガラと音を立て開くドア
そしそこから出てきた、一人の女性
外国人を思わせるようなきれいな金髪、すらっと長い身長、美歌といい勝負をするのではないかと思わせる胸、そして細い脚
パーフェクト
俺の頭にはそんな文字が浮かんでいた
「國津愛唯といいます、よろしくお願いします」
男子どものウォオオオオオという雄叫びがクラスを響かせた
え、いや俺はやってませんよ？嘘じゃないですほんとです
「静かにしろー！」
先生の一言でみんなが黙る、こういうときって先生ってやっぱり強いなと思うよな
「あーじゃあ、國津さんは・・・・・」
「せんせぇー、私の隣あいてますよー！」
「おっ、そうか、じゃあ國津さん、橘さんの隣に行ってください」
「はい、わかりました」
緊張しているのかはわからないが、すこし固い気がする、もしくはそういう性格なのか？
通り過ぎていく國津さんを男子どもはがん見していた、俺は決してそういうことはしなかったが、隣にいた琉はほかの男子生徒と同じくガン見していた、その様子を女子生徒は蔑みの目で見ていた、まぁ、そりゃそうですよねー
「ほらーお前ら國津さんが困ってるだろ、さっさとホームルーム始めるぞ！」
先生のはっきりした声で生徒全員がきちっと前を向いた
「では、まず今日の――――」
よし寝よう、眠いわ、うん眠い
「琉悪い、俺朝早かったから眠いから寝るわ、んじゃ」
「了解、何時限目に起こせばいい？」

「・・・・体育って何時限目？」
「三時限目」
「じゃあその時に起こしてくれ」
「あいよ、お休み」
起こしてもらう時間を決め、その時何をしようかなー、などと考えていたら、いつの間にか俺は睡魔にやられていた
†
†
視界と身体、どちらもぐわんぐわんと揺れた
「うおい！颯真！颯真！お前いい加減起きろ！」
「ん、あぁ、おう」
またまた眠たい目をこすりながら起きる、頬がなんか痛いなと思ったら、机の跡がくっきるのこっていた
「おい、颯真！さっさと目ぇ覚まして、体育館行くぞ！今日はバスケだとよ！」
「おう」
「寝ぼけてんなよ！」
「おう」
「・・・・・一＋一は？」
「二」
「答えんのかよ！まぁいい、さっさと行くぞ！」
「わかった」
まだ完全に脳が起きていないのか、体が重たいが、俺は琉と一緒に体育館に向かった
俺たちのクラスは三階、体育館につながる道は一階、というわけで俺たちは階段を下りる
一階につくころには、脳が完璧に起きたようで、体も軽かった
渡り廊下を渡り、あ、いえ、ダジャレじゃないですよ？
体育館に向かう
体育館の中では、すでに体育指導の先生が来ていた、この先生が意

外と恐くて、みんなきっちりしていた
俺たちは遅く到着したせいか、かるく睨まれたが、何事もなかったように列の中に入っていった
「・・・・・・雨宮、紀陸、お前ら二人で体育館の周り五周走ってこい、三分以内でな」
「そりゃ無理でしょ先生」
「まったくその通りだぜ・・・・・こっちは起きたばっかなんだぞ・・・・」
「異論は認めん、さぁ走れ」
「だから待てって――――」
「よーいスタート」
「「うおい！てめぇ本当に先公かよ！」」
俺と琉は走り出すとともに、赤城先生という名の悪魔につっこみをいれた
体育館の中は結構広々としていて、一周走るにも結構時間がかかった
そんな俺たちの気も知らずに、ほかの生徒たちは俺たちを見て爆笑していた、なんてひどい奴らなんだろう、まったく
文句を言いつつも俺と琉は走り終えた
「ふむ本当に三分で終わらせるとはな、少しびっくりしたわ」
「「お前が言ったんだろうが！」」
俺と琉の怒鳴り声が体育館中に響いた
「ほら、お前らさっさと列の中に入れ、バスケットのチームが発表できないだろ」
俺と琉はもう何も言うことはなかった、というよりは、もう何を言ってもだめだろうということを把握した
疲れた足で列の中に入る、周りの生徒たちがまだ笑っている、いい加減にしとけよ
列に入ってきちんと並んだ状態になると、悪魔が話し始めた
「じゃあ、今日はバスケットボールをするからな、チームは五人組み、その五人組はお前たちで決めろ！」

「最終的に俺らが決めんじゃねぇかよ！お前さっきチーム発表ができないとか言ってただろうが！」
「おい雨宮、先生に向かってお前ってなんだお前って」
「お前はお前だからお前なんだよ、お前に先生なんていうか」
「今先生って――」
「餓鬼か！」
「というわけでお前ら今からチーム作れー時間は二分な、はい作れ」
「・・・・・・もう疲れた」
「颯真ぁ！ウチ達と組まない？」
威勢のいい声が後ろから聞こえてきた、振り向くとそこには、美歌、琉がいた
「おう！いいぜー」
「あと二人はどうするんだ？」
「うーん・・・・・どうしようねぇ、そこまで考えてなかったぁ」
「そうだな・・・・・、あっ！おい、珀！お前俺たちのチームはいらない？」
「あ、颯真君・・・・・僕なんかでいいなら」
「全然オッケーだよ！たしか珀君ってバスケ部よね？」
「うっうん、でもそこまで力になれるかわかんないよ？」
「あー大丈夫だ、その時は俺が――」
「いやお前は頼りにはならないんじゃないか？琉」
「・・・・・・・あーあ、扱いがひどいなー」
「あと一人ね！誰かいないか・・・・・・あっ！愛唯ちゃん！ウチ達のチームはいらない？」
「え・・・・・、わっ私、運動音痴だけど・・・・」
「全然構わねぇよ、体育なんて、楽しむものだろ？一緒に楽しもうぜ！」
「あっ、うっうん、ありがとうございます・・・・・」
「敬語は使わなくていいよ、どうせ俺たちも使わないと思うしさ、な？颯真」

「確かに俺と美歌と珀は使わないかもしれないけど、下級な琉は・・・・」
「なぁ本気で泣いちゃうぞ、俺本気で」
そんなときクスクスと笑う声がした、その方を向くと、愛唯さんが笑っていた
「あっ、愛唯ちゃん笑うと印象変わるね！とってもかわいい！」
「本当に可愛いな、結構おとなしめだと思ってたから、がらりと印象変わったな」
「えっ、そっそんなことないよ・・・・・」
すこし顔を赤らめて下を向く愛唯さん、この子可愛いなオイ
「とりあえず、五人決まったな」
「そうだな」
「そうね」
「そうだね」
「うっうん」
どうしようか迷っていたとき
「はい！終了、お前ら決まったかー？代表者決めて、俺のところまで来い！」
悪魔・・・・・もとい赤城先生が叫んでいた
「代表か誰にする？」
「颯真！」
「颯真が一番いいんじゃない？」
「僕も颯真君がいいと思う」
「私も・・・・」
「・・・・・そうかい、んじゃ行ってくる・・・・・」
なぜかみんな団結し俺を推薦してきた、俺のどこがいいのかな、責任感ゼロ、運動能力は並、勉強も並、俺を選ぶなら珀のほうがいいだろうに
だるそうにゆっくり歩いていると、赤城先生の周りに数人集まっていた

「おい、雨宮、さっさと来い」
「・・・・・ういー」
気だるそうな声をだし俺は軽い駆け足で赤城先生のところに向かった
「一、二、三、四、五、六、よし全員いるな、というわけでお前らにはここでジャンケンをしてもらう、勝った順から横に並んで行け」
先生が言い終わると、俺とその他五人は丸くなり、ジャンケンを始めた
「最初はグー、ジャンケン、ぽい！」
誰かが掛け声を出していた、それに合わせてみんなが手を突き出すグーが三人、チョキが二人、パーが一人、ちなみにパーが俺だ、みんなからお前・・・・という感じの目で見られたが、特に気にしないことにする
「あいこで、しょ！」
また、誰かの掛け声で俺たちは手を突き出した
グーが四人、チョキが一人、パーが一人
ちなみに今回はグーを出した
「ちょっとまて、きまんねぇから、こっち側とこっち側にわけてやろうぜ」
決まらなかったので俺が言い出した、三人集まったところで、再度ジャンケン
「ジャンケンぽい！」
チョキが二人、グーが一人
なんと、俺がグーだったので勝ってしまった、思わず
「おっ、勝ったわ」
と口にしてしまった
俺は勝ったので、一番前に並ぶ、すると決着がついたのか、次々に俺の後ろに並ぶ
「おし、決まったな、じゃあ雨宮から順に、一班、二班、三班、四班、五班、六班だ、まず一番最初は、一班対五班と三班対六班、一班と五班はステージ側のコートをつかえ、三班と六班は入り口側の

コート、残りの班は審判をやれ、いいな？わかったら行け！」
他の生徒はきびきびと動くのに対し、俺はだらけながら、ほかのメンバーが待つ場所に行った
「どうだったー、颯真！」
「ん・・・・、ステージ側のコート第一試合目」
「早速だね・・・・・、僕頑張るよ」
「おう、頼りにしてるぜ珀、じゃあ行くか」
俺以外のメンバーがうん、というのを聞いて俺はステージ側コートに向かった

†

†

これ以上のことを書くと、ほかのジャンルになりそうなのでやめておこう
何のことかって、うんまぁ、把握してくれっ！
結果は六十一対四十八で俺たちの勝ちだった、珀が華麗なるドリブルや、レイアップシュート、スリーポイントシュートまで見せてくれた
俺と琉はとりあえずディフェンス側についてた、ひたすらボールをカットするのだが、やっぱり難しかった
美歌は、身長を生かしたシュートなどで、攻めの方に行っていた
愛唯さんは、運動音痴などと言っていたが、きびきびした動きをしていた、まるで何かを経験しているような、特に驚いたのが、俺と琉が抜かされたドリブルを、いとも簡単に止めたことだった、相手も切り替えしてきたのだが、素早いフットワークで目の前にいき、ボールをはじいていた
そんな姿を俺と琉はガン見していた、あ、いえ、別に変な意味でじゃないですよ
そんなこんなで、体育の授業は終わった、その後は普通に授業を受け、弁当食べ、学校生活を過ごした
そして放課後

俺と琉は帰る用意をしていた、俺達は面倒だという理由で帰宅部に入った、美歌はというと、小学校のころからやっているバレーボールを高校でもやっている、幼いころからの積み重ねが実っているのか、一年生唯一のレギュラーに選ばれたそうだ、そういうところは素直に流石だな、と思う
今日も普通に普通の学校生活が終わった、玄関で靴を換え、外に出る心地よい風が頬に当たる、太陽もいい感じに照らしてくれている
「さて、颯真帰るか」
「だな」
そう言い、俺達は歩き始めた、いや正確には歩き始めようとした時だった
「あの、雨宮君・・・・・？でしたよね」
不意に後ろから名前を呼ばれ、俺はすかさず、後ろを振り向く、するとそこにはパーフェクト転校生、愛唯さんがいた
「そうだけど・・・・・、どうしたんだ？」
「あ、まさか告白とか？」
琉が茶化すように言ったので、俺は琉の脇腹を肘で打った、「ぐぽっ」という声と共に琉はその場にしゃがみ込んだ
「あの、いきなりで悪いんですけれども・・・・・、この学校で、一番人目につかないところってあります？」
・・・・・なぜそんなことを聞くのだろう？
そう思ったが、私情に口を出すほど性根は腐ってない
「うーん、そうだな、校舎の屋上とか、体育館倉庫とかかな、でも今は体育館倉庫はやめたほうがいいぞ、部活で使っているやつらもいるからもしれないからよ」
「ありがとうございます！雨宮君！」
「あー、あと愛唯さん、普通に颯真って呼んでもらって構わないよ、なんか雨宮って呼ばれると、歯がゆい」
「え・・・・っと、わっ・・・・わかりました、ありがとうございます、颯真君」

「おう、じゃあな」
「はいっさようなら」
小さく手を振る愛唯さんは俺の目にとても可愛らしく映った、俺が歩き始めると、愛唯さんは後者の方に走って行った
「お・・・・・い、待てよ・・・・・・・」
何か後ろで声が聞こえたので振り向いてみると、そこにはうずくまっている琉がいた！不思議だな、なんでうずくまっているんだろう
「おい、どうしたんだよ琉、さっさと行くぞ」
「てめぇが俺に肘打ちしたんだろうが！」
「だっけ？ほら行くぞ」
「理不尽だな、泣きたくなるぜ」
そんなしょうもない会話をしながら俺たちは下校するのであった

†

†

（颯真君って優しい人・・・・・）
心の中で私はそう思う、今まで何度かある事情で転校してきた、そのたびに私は初めて会った人たちに同じ質問をしていた、みんな教えてくれるのは教えてくれたのだが、少し気味悪がっていた
しかし彼はそんな顔をしなかった
（だけど、なんだろうこの気持ち、今までとは何か違う）
心がちくちくするような痛みが今はある
だが、私はそんなことも言っていられない、やらなくてはいけないことがあるから
（確かこの階段を上がれば、屋上が）
階段を上がりきると、大きなドアがあった、ドアノブに手をかけ回し押す
ギィィィと重い音がすると同時に、大きなドアが開く、暖かい風と日差しが私を迎えてくれていた
そこで私はある事をする、アニメじみた、誰も信じてくれないような事を

「レイレちゃん、交信をお願い」
「分かった！」
どこからか小さく可愛い生物が現れた、この世に存在する生物では説明できない、とても可愛らしい生物が
その生物・・・・・レイレは、光り輝くと、可愛らしい、アニメ声で
「ネットワークＯＫ、勇者育成所との交信をします」
ブーというノイズが一瞬聞こえると、私の頭の中に声が響く
「認証開始・・・・・・・・認証完了、勇者レイン、転送を開始します」
「・・・・・はい」
今から私は國津愛唯ではなく、勇者、レイン・エイファランになる
もう一度ブーというノイズが聞こえると、レイレの光が増し、私は屋上から消えた
†

†
「でよ！今日の授業で相沢のやつ、野蛮人に怒られてやんの！マジ笑ったぜ？お前もおきてりゃよかったのに」
「マジかよ・・・・・そればっかりは見たかったな」
俺は琉と共に学園を出て数百メートルのところにいる
まだ後ろを見れば学園が大きく見えるくらいの距離だった
「てか、お前寝てたからわかんないだろうが、来週に古典テストがあるらしいぞ」
「え、ガチ？それ、俺古典無理なんだけど・・・・・」
「ふっ、しょうがねぇな、今度俺が教えに――――」
「美歌が確か古典得意だったな、今度教えてもらうか」
「俺の！俺の！俺の話を聞いてくれよ！」
「ちょっと歌ってんじゃねぇよ」
怒られるだろ、いろいろな意味で
そんなとき、俺はふと、さっきの愛唯さんとの会話を思い出し、学園の屋上を見てみた

その時だった、屋上から何か眩い光が発せられた
あまりにも眩しく、俺は目を閉じた
（・・・・・っ！なんだ？）
心の中でそう思いながら、ゆっくりと目を開け、屋上を見るが、なにもない
（気のせいか？）
「どうした？颯真、なんか真面目な顔して」
「いや、なんでもね」
「なんだよ隠し事かよ、言えよ気になるだろ」
「いや、俺の部屋のエロ本、妹に漁られてないかなと思って」
「・・・・・・そんなことを真面目に考えていたのかお前は」
「そうだが？」
「いろいろ苦労してんだなお前も」
「やっとわかったか」
気にしてもしょうがない、俺はそう思い足を速め、家に向かった
「颯真の家とうちゃぁーく！」
「どっちにしろお前の家もすぐ隣だろうが」
「じゃあ、俺の家にもとうちゃぁーく！」
さて家の中に入るか
玄関のドアを開け、玄関で靴を脱ぎ、二階に上る、ちなみにいうと、階段を上りきってすぐ右にある部屋が妹の、その先にあるのが俺の部屋だ
両親たちは一階に二人で寝ている、そのため部屋は広い
俺は部屋に入り、荷物を机のわきに置き、制服を脱ぎ、ハンガーにかけ、私服に着替える
私服といっても普段着だ、結構ラフな格好をしている
ワイシャツを片手に下に降り、洗濯機の中にぶち込む、冷蔵庫をあさり、飲み物を片手にまた部屋に戻る
飲み物をベッド付近に置き、ベッドにうつ伏せになる
何もすることがない、かといって、勉強をする気にもならない

とりあえずグダグダしていた、漫画を読み漁ったり、ファッション関係の雑誌を読んだり
何時間か経ち、俺はベッドに横になった
家には今の時間帯は誰もいない、父は会社、母はパートをしている、妹はというと、この時間帯にいないなら、たぶん遊びに行っている
やることはあらかたやったので、俺は外を見ていた
今の時刻はだいたい五時半、辺りが夕焼けに染まっている
こういう風に感傷に浸っているのも悪くないなーと思っている矢先だった
窓の向こう側で先刻みた光がもう一度見えた
「あれはっ・・・・！」
思わず声に出してしまうほどの出来事だった、一度ならわかるが、二度
流石に無視することはできなかったので、すぐさま玄関に向かい、家を出て、光が見えた方向に走った
夕日に向かって走った！といってもいいだろう、方向が一緒だったからな
なんかカッコよくね
そんなことも考えつつ、俺は光が発せられた場所についた、するとそこには一人の女性がいた、そして俺はその女性に見覚えがあった
「愛唯さん？だよな、ここで何してるんだ？」
「そっ颯真君？なっなんでここにいるの？」
「こっちが質問してるのに、質問してくるなよ」
苦笑しながら俺は言った
「ごっごめん・・・・・・、とっ特に何もないよ、ただ散歩していただけ」
「そうなのか？それならちょっと聞いてもいいか？」
「なっなに？」
「愛唯さんさ、多分場所ここであってると思うんだけど、光見えなかった？」

俺の一言に、愛唯さんは衝撃を受けていた
「な・・・・・・、いっいや、私は見てないけど」
動揺であたふたしている、・・・・・・わっかりやすいなこの子
「いやさぁ、その光学校の屋上でも見えたんだよね、なんだかわかる？」
「あーっ！私、ちょっと用事があったから、じゃっじゃあね！」
俺の横を走り去ろうとする愛唯さんの腕を俺は掴んだ
「っ！」
「なあ、転校初日に、しかもあったばっかで疑って悪いんだけどさ、わかってるよね、愛唯さん」
「・・・・・・どうしようレイレちゃん」
どうしよう、小声で全然聞こえないわ
「・・・・・・・送るしかないんじゃない？」
「でっでも、彼は、無関係だよ？」
「愛唯も無関係だったでしょ」
「確かにそうだけど、でもぉ～・・・・・」
「じゃないとこっちの世界がばれちゃうんだよ？」
「・・・・・・わかったよ」
話が終わったのか、愛唯さんは俺の方にゆっくり歩み寄ってきた
「ごめんね、颯真君、本当は・・・・・こんなことしたくないんだけど」
最悪なセリフと共に俺の目の前は真っ暗になった

新たな勇者の誕生（前書き）

どうも、二話目を投稿してみました、考えながら書いているので、投稿が遅くなると思いますが、ご了承くださいまし

新たな勇者の誕生

頭が痛い、体が重い、なんかだるい
そんな感情を抱きながら俺はゆっくりと目を開けていった
「やあ、お目覚めはいかが？」
いきなり声を掛けられた、立ち上がろうとするが、全然上がらない、なにかで固定されているような感じだった
「・・・・・・ああ、最高だよ、こんなに気持ち悪いのは始めてだ」
「それはそれは、いいことじゃないか」
「なあ、質問があるんだが、質問していいか？」
「ここは勇者育成所の研究室、僕の名前はドクターさ」
「先に言うなよ、俺のセリフがなくなるだろうが」
「いいだろ？君が疲れなくて済むんだから」
「じゃあもう二つくらい」
「君が、僕たちの存在を知ってしまったから、というものと、今から君は勇者になるんだ」
「・・・・・お前すげぇな」
「よく言われるよ」
「何でこの世の中に、勇者なんていう職業があるんだ？勇者なんてゲームとかアニメの世界だけだろう」
「最近まではそう思われていたよ、もちろん僕だって勇者？ふざけるなっていう感じだったけどね」
「俺は今でもそう思っているんだが」
「大丈夫、君が次目覚めた時はだんだん自覚が出てくるからさ」
「ふーん」
「それにしても君はずいぶん落ち着いているね、この間の女の子よりずっと落ち着いている」
「それって愛唯さんの事か？」
「ご名答、彼女も勇者の中の一人だよ」

「・・・・・・なるほどな」
あの光はやっぱり愛唯さんがやったやつなのか、それにしても急だね、なんだよ勇者ってこの情報社会の中で生きている俺でさえ聞いたことねぇよそんな職業
「おいお前」
「お前じゃないドクターだ」
「ドクターさんよ、俺は何で勇者にならなくちゃいけないんだ、お前らの存在を知ったくらいで」
「口約束くらいで信じられると思うのかい？僕は信じられないね、だったら、君も勇者にしてしまえば、早い話だろ？誰にも言えなくなるんだから、レイレも同じ意見だったようだ、まったくあの子の感性には毎度毎度驚かされるよ、人間並みだ」
「レイレって誰だよ」
「その内分かるさ」
頭もだんだん回復してきた、俺は辺りを見回した
見た感じは普通の研究室と何ら変わりない、ひたすらドクターというやつがなにやら機会をカタカタ音を立てながらいじっていた
俺は腕を手錠で縛られ、足を台に固定されて、身動きが取れない状態だった、唯一動かせるのは頭部だけだった
「っよし、ひとまず完了だな、君も疲れただろう、お休み」
「おっおい！何すんだお前、やっやめ――――――」
俺はそこまで言って気を失った
†　　†
ふと目が覚めた
辺りはもうすでに明るい
周りを見ると見慣れた風景、そうここは自分の部屋だった
ということは・・・・今までのは夢か！なんだ夢なら納得できる
きっと昨日なにかして、疲れて寝たんだろう
にしても、変な夢だったな・・・・・

そう思いながら俺は部屋を出た
「母さん、父さんおはよう」
「あら、おはよう颯真、今日も早いわね」
「おはよう颯真」
「おはようお兄ちゃん」
「よう、わが妹よ」
リビングに行くと、家族がすでに食事をしていた、昨日よりは少し遅めだったが、いつもよりは早かった
「いただきます」
目の前に置かれた食事に手を付け始める、うん今日もおいしい
あらかた食べ終わる頃に
ピンポーン「颯真ぁいくぞー」
幼馴染の声が家に響いた
「おーう、ちょい待ってろ」
食器を台所におき、歯磨きをしながら、学校の準備をする
スクールバックの中に、教科書や資料を詰め、制服を着、琉が待つ場所に向かう
「またせたな、行くか」
「だな」
「行ってきます」
「いってらっしゃーい」
母の声を聞き届け、俺は琉と学校に向かった
今日は美歌に会うこともなく、二人でどうでもいいような話をして学校についた
自分の教室に入り、机の中に教科書を入れる
することもなく、机に突っ伏していると
「おっ、やっぱり愛唯ちゃん可愛いよなぁ」
なんていう男子生徒の声が聞こえてきた
後ろを見ると女子に囲まれているパーフェクトな容姿を持つ愛唯さんがいた

特に話すこともなかったのでまた机に突っ伏した
その数分後、先生が入ってきた
「せきつけぇ～出席とるぞ～、雨宮ー」
「うい」
「伊藤――――」
眠いなよし寝よう
「琉悪いんだが」
「分かった、寝ろ、今日は体育ないから飯食う時間になったら起こす」
「よくわかってんじゃん、じゃあお休み」
闇の中にインしていった
†
†
誰にも起こされずに、なぜかパッと目が覚めた
むく、と起き上がると琉が少し驚いていた
「どうした？今は三時限目の途中だぞ？」
「・・・・・・なんか起きちったから、授業受けるか」
机の中から教科書とノートを取り出し、高校生らしいノートを取って授業を終えた
四時限目も同じことを繰り返し、特にこれといっていいものもなく、終わった
飯の時間、俺と琉は教室にたくさんの人がいたので、屋上に行くことにした
屋上の大きなドアは鍵がしまってなくラッキーとおもいながら、そのドアを開けた
今日は日差しがうざったらしいくらいに俺に降り注ぐ、七月の上旬となるとやはり暑い、昨日はたまたま気温が丁度良かった、春の気候とさほど変わらなかったからな
屋上の長椅子に座り、弁当を広げる、周りは緑色のフェンスで、飛び降りなどが難しいことになっている、まあ、この学園は至って普

通だから、そういうのはないんだけどな
ふむ、今日もおいしそうだ
琉と駄弁りながら飯を食べる
食べ終わると、そのまま昼休みに入るので、屋上で日差しに当たっていた
暑いが、こういうのもたまにはいいかな、などと思う
人は自然より恵みを受けているのだ！
・・・・・いや自分でも意味の分からないことを言っているのは分かってるんですよ？
でも、やっぱり大切だなって思うじゃないですか？たまにありません？
そんなことを思いながら仰向けになっていると、いつの間にか寝ていた
気が付くと辺りはすでにオレンジ色に染まっていた、・・・・・あの琉の野郎、放置していったな
ゆっくりと身体おこし、大きく深呼吸をする
身体も重くはないので、屋上を出ようとしたその時
ガチャと音を立てて屋上の扉が開いた、そこから現れたのは完璧なる女性愛唯さんだった
「おっ、愛唯さんこんにちは」
「あっ、颯真君！こんにちは」
「どうかしたのか？こんな時間に屋上来るなんて」
「え・・・・？颯真君、知ってるでしょ？」
「ん？何のことだ、俺は分からないぞ、愛唯さんの心が読めるわけじゃないし」
「あっあれ？」
俺が不思議そうな顔をしていると、それよりもっと不思議そうな顔をする愛唯さん
「ねっねぇ、レイレちゃん、颯真君って確か勇者になったんだよね・・・・？」

「そのはずだけど・・・・？」
「なんで分からないのかな？」
「さあ・・・・・・、夢だったとかって思ってるんじゃない？ほら愛唯も最初は夢だ夢だーとか叫んでたじゃん」
「やっやめて、そういうこと言うの！」
ひたすらに一人で話している愛唯さん、どっどうしたんだ？まさか、幽霊と話しているのか？
これは余談だが、俺は幽霊の存在を信じている、俺自身心霊現象を受けたことがあるからな、金縛りだとか、知らない女性の声・・・・思い出すだけで怖いのでもう言わないことにしよう
「あっあのさ、颯真君！」
急に俺に話を掛けてきた
「ん？なに？」
「昨日・・・・・・、なんかドクターとかいう人に会わなかった？」
「ドクター？・・・・・・・・ああ、夢でいたかなそんな人、てか何で愛唯ちゃん、俺の夢の人物名わかるの？」
「えっと、それは」
「もういいよ、愛唯、僕が話すよ」
「え！」
愛唯さんがいきなり驚いたと思ったら、愛唯さんの隣が眩しく光った、この光は・・・・！昨日見た光と一緒じゃないか！
光が少し落ち着くと、なんとも可愛らしい羽根をつけた生物がパタパタと空中に浮いていた
なっなにこの生物・・・・・・！
超かわいいんだけど！
「ふぅ、こうやって会うのは初めてだね、僕は愛唯のオペレーターアニマル、レイレだ！」
どうしよう、ツッコむところが多すぎて、逆にどこのツッコんでいいかわからない・・・・・
「あのーうんとなんだっけ、レイレ？お前はえっと、なに？」

「僕は愛唯のオペレーターアニ――――」
「いやそれは分かったから、お前なんて言う種だ？」
「僕は、ホワイトデビルミニドラゴンさ！可愛いだろ？愛らしいのが特徴の種なんだ」
自分で可愛いとか言っているやつ初めてみたは、しかも動物で
「・・・・あのよ、なんでドラゴンなんているんだ？ここは、地球だろ？」
「そうだよ、ここは地球だよ、だけど僕は他の星の生き物さ、もともとある惑星にいたんだけどね、勇者育成所に引き取られて、そのまま育てられたのさ」
「ふーん・・・・・、さーてこの夢はいつ終わるのかな」
「そっ颯真君？これは夢じゃなくて現実だよ？」
「そうか、確かに愛唯さんもリアルに再現されてるけどな、てか早くさめないかな」
「ほっほら！こうすればっ・・・・・・！」
いきなり愛唯さんが俺の頬を引っ張った
「痛い！痛い！・・・・・痛いってことは」
「そう！だから言ってるでしょ？ここは現実なの！」
「じゃあ待て！俺が昨日見た夢はあれは夢じゃなくて本当の事だったのか？なんかドクターとかいうやつに拘束されたのとかも？全部？」
「そうだよ、君はね、勇者になったんだよ！昨日でね、どう？これで分かった？」
「・・・・・まだ信じがたいが、とりあえず把握はした、で？何しに来たんだよ」
「統領から颯真君と一緒に、育成所に来てっていう指令が出たから、探しに来たんだよ？」
「というわけで、今から行くから、僕の近くに来て！」
「統領・・・・・・ねぇ」
疑問に思いつつも、俺は言われた通りレイレの近くに歩み寄った

「じゃあレイレちゃんお願い」
「了解！ネットワークＯＫ、勇者育成所との交信をします」
頭の中にノイズ音と共に、声が響いた
「認証開始・・・・・・・認証完了、勇者レイン、雨宮颯真、転送を開始します」
そしてもう一度ノイズ音が流れると、俺の目の前は真っ白に染まっていた
数秒間、なんか宙に浮いているような感じになっていたが、すぐに、地面らしきところに足がついた、やっぱり足がついていないと人間落ち着かないものだ
「さあ！ついたよ、ここが勇者育成所だ！」
レイレの可愛い声が耳の中に届くのを感じ、その後辺りを見回した、感想を述べると、なにやら、どこかのＲＰＧの中に入ったかのような町がそこにはあった
フラスコの中に緑色の液体が入っている絵が大きく貼られた店や、剣と剣が重なっている絵が貼られている店、鎧や立の絵が貼られた店など、ＲＰＧの世界ではありきたりの店がたくさんあった、しかし、現実にはまずない光景を目にして俺は興奮を隠せなかった
「さあ颯真君！あの建物にいこっ！」
俺の隣にいた愛唯さんが指さす場所は、なんともどでかい建物だった、なんつーか威厳丸出しっていうか
その建物に俺たちは向かった
途中に、たくさんの勇者達とすれ違った、みんな、それぞれ違ったような武器や防具を身に着けていた、剣、大剣、弓、杖、ハンマー、ボウガン、銃、鈎爪等、どうやらたくさんの種類の装備品があるようだ
そんな風に、初めて見る世界をきょろきょろと探索していると、いつの間にか、目の前にどでかい建物が出現していた
「ここは大神殿っていうんだ！ここでは新しい勇者や、職業をかえたい勇者が来るところなんだ！君は今からここで、勇者としての名

前、自分に合った職業を決めてもらうよ！」
レイレが言った言葉に俺は、なんだかハローワークみたいだなと心の中で思い、苦笑しながら、俺達はどでかい建物・・・・・・もとい大神殿の中に入っていった
神殿の中は真っ暗だったが、扉が、ドォオオンという大きな音を立てて閉まると急に神殿内が明るくなった
愛唯さんとレイレが歩き（飛行）し始めたので、後に続く、神殿の中は、今は人がいなく靴が床を叩くカツンカツンという音だけが響いていた
数百メートルはすすんだろうか、そのくらいの時に、愛唯さん達が止まった、俺も続いて止まると
「勇者レインよ、今日は何の御用かな？」
とてつもなく渋い声が神殿内に響いた
「ご無沙汰しております、大魔道士ジェミル、今日は私ではなく、私の隣にいる、新米勇者の職業と名前を決めに来ました」
恭しい態度に変わった愛唯さんは俺の説明を簡単にしてくれた
「ほう・・・・・・彼氏か？」
いきなりすごいこと聞いた来たぞ？このオッサン！
「ちっ違います！からかわないでくださいっ！」
必死になって拒絶する愛唯さん・・・・・・・・そこまで拒絶しなくても・・・・・・
「わっ私は構わないけど・・・・・・」
愛唯さんが何か言ったようだったが、何を言っているか言葉として聞こえてこなかった
「ふむ、お主が新米勇者か・・・・・・名は？」
名はってことは、普通の名前でいいのかな？
「俺は雨宮颯真って言います」
「よろしい・・・・・・、さて颯真よ、お主はなぜ勇者になったのだ？」
え？・・・・・・これって素直に本当のこと言っていいのかな、

俺の理由って・・・・・・
「特にありません」
だって・・・・・・ねぇ？
その言葉に唖然としていた大魔道士ジェミルは、数秒間は唖然としていたが、すぐに口元が緩くなって
「はっはっはっは！久しぶりに面白い奴が来たな！特にない・・・・・・か！ふむ面白いのお前さんは！」
いまだに笑っているジェミルを隣にいた愛唯さんとレイレが驚いた様子で見ていた
「ジェミルさんが笑ってる・・・・・？私初めてみた！」
「僕もジェミルが笑っているのは初めてみたよ！」
そんなに珍しいことなのか？確かにこんな威厳丸出しみたいな顔をしたオッサンが笑っているのは珍しいかもしれないが・・・・・・
「で、お前さん名前は何という？」
「いやだから雨宮颯真ですって」
「ジェミルさんが物忘れ・・・・・？嘘でしょ・・・・・・！」
いや、うん、まあ・・・・・人だから一応、あるんじゃないかな？
「では、本題に入ろうかの、颯真」
さっきまで笑っていたが、今度は威厳丸出しの大魔道士になっていた
「お主に今からいくつかの質問をする、正直に答えてくれ」
おおっ、なんかＲＰＧっぽい！
「お主の母と恋人が連れ去られた、お主はどうする？」
・・・・・・やっべ、今一瞬思ったのがありきたりすぎるだろっていう、だけどこういうのって一番難しいと思うんだよな、どちらか・・・・・・、いやまて・・・・・・・そっか！
「どっちも助ける」
これが一番だろ？だってよ、ジェミルはどっちをどうするとは言ってないからな、どっちもという選択肢もありなはずだ
「ふむ、では次だ、お主は世界最強の武器を手に入れた、しかしもうすでに戦う相手はいない、どうする？」

むっ・・・・・、難しいな、相手はいないんだろ？だけど使ってみたいよな、どれだけ強いのかっていうのを知りたい、うーん、なにかないか？あ・・・・・・・そうだこれだろ
「もとからその武器はないものとする！」
もともとないものを使おうっていうのはまず無理だろ？うし、こんなのでいいだろ
「ほうほう・・・・・やはり主は面白いの、では次の質問だ、お主の願いが一つだけかなうとしよう、お主は何を願う？」
願い・・・・・・か、そうだなぁ～、俺ってやっぱり普通すぎるからなここは
「優れた能力がほしいね」
「なるほどな・・・・・・、さて次の質問だ、お主が――――――」
その後七個の質問を受けた、全部で十個の質問だった、どれもありきたりの質問だったが、答えるのには苦労した、自分が思っていることをそのまま話すっていうのも意外に難しいことだ
「これで主への質問は終わりだ、少々待っておれ」
そういうとジェミルは煙のように消えていった
質問が終わり、すこし体を伸ばしていたとき
「お疲れ様、颯真君、質問の答えきいてたけど颯真君って面白いね」
微笑みながら俺に向かって声をかけてきた愛唯さん
「そうか？俺は自分の本心を全部言っただけなんだけどな」
恥ずかしさを紛らわすように、頭の後ろを掻きながら俺は言う、まあ、結構考えたりはしたけどな
「僕も聞いてて面白かったよ、君は勇者としての才能があるのかもしれないね！」
「どんな才能だよ」
苦笑をしながら俺はレイレにツッコむ、なんか勇者としての才能って変な感じだよな、現代社会にはないような職業の才能なんて、どんなのか分からないし
「待たせたな、颯真お主の職業が決まった」

後ろを振り向くとジェミル大魔道士がそこにいた
俺は緊張のあまりに息をのむ、だってたくさんある中の職業のどれになるかを決めるんだぜ？結構緊張するぞ
「お主の職業は・・・・・・・・「剣士」だ！」
「普通かっ！」
思わず突っ込んでしまった、だって！だって剣士だよ？なんか一線ずれんのかな？とか期待してたのに！なんなんだよ俺！何でもかんでも普通ってマジ泣きたいよ！
「なにごとも普通がいいのだよ」
「・・・・・・すべてが普通な人の気持ちがわからないからそういえるんだろうね」
「まあそれは、もう済んだこととして、次に主の名を決めよう」
済んだことにされたよ！・・・・・・だが何事もポジティブにいかねば、まぁきっと名前くらいはカッコよくなるだろ、どうせ厨二っぽい名前・・・・・・
「ノーマル・ザ・ノーマルなんていうのは―――」
「ざけんな！」
俺はセキズイ反射でツッコみを入れていた、なんだよノーマル・ザ・ノーマルって、普通って意味しか含まれてねぇだろ！しかも超カッコ悪いわ！
「冗談だ、主の名は、トイナ・ルマーノ」
トイナ・ルマーノか・・・・・・・なかなかいい名前・・・・・・・・ってん？
トイナ・ルマーノ？トイナ・ルマーノ、トイナルマーノ・・・・・・・トイナルマーノ↑
「ノーマルナイトて」
思わず口にしてしまった
どんだけノーマルっていうのを入れたいんだよこの魔道士は！
「これも冗談に決まっておろう、本当の名前を言おう、ソウエン・リジェント、それが主の勇者としての名だ主もそれでよいな？」

俺は少し考えてからゆっくりとうなずいた
「よし、ではここに新たなる勇者は作るものであって作られるものではないソウエン・リジェントの正式な登録を許可する！」
その時だった、どこからか、優しい鐘の音が鳴り響いていた
そして今から俺の――――――いや、ソウエン・リジェントの物語が始まるんだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7040z/

勇者は作るものであって作られるものではない

2011年12月26日21時07分発行